駒場友の会

会報第23号

新入生歓迎特別講演会

教養学部には毎年四月に三二〇〇名余りの新入生が入学します。キャンパスはこの時期、新入生歓迎一色になり、新歓行事がたくさん開かれます。それらは部やサークルの勧誘のために学生が行っているものや、クラスの歓迎会です。

たしかに入学式で総長や学部長が「入学おめでとうございます」と何度も言います。それとは別の形で、駒場友の会も新入生にウェルカム！と言ってあげたい。そういう思いから、毎年四月に講演会を開催しています。

五回目に当たる今年は、野矢茂樹先生が語る「なぜ哲学が必要なのか」でした。

四月十四日（月）午後六時二〇分から教養学部21KOMCEE地下一階レクチャーホールにて開催。

実はこの硬派なタイトルに主催者である友の会事務局は相当に心配をしていたのです。会場がガラガラだったらどうしよう？

ところが驚くべきことに今回初めてこの講演会は満席以上になりました。補助いすを出しても足りず、多くの学生が床に座って聞きました。いったいこれは何なんだろう。

たしかに野矢先生は日本を代表するとも、現代を代表するともいえる哲学者で、中学や高校の教科書にも登場します。

が、それだけではないでしょう。この会場にいた人は、「これが哲学の力なのだ」と感じ取ったと思います。

野矢先生のお話は、自由に考えるという（役に立たない）営みが評価される場所が大学である。「大学へようこそ！」

こんなに熱いウェルカムを聞いた新入生は幸せ者です。これが大学の本当の姿なのです。

東京大学の教養学部は、旧制一高以来の伝統を引き継いで、一貫して「教養」の価値を主張し続けています。そういう大学にようこそ！

講演会の後は、野矢先生を多くの学生が取り囲んで、サンドウィッチを食べながら懇談しました。多くの参加者に喜んでいただいたと思います。

新入生父母と学部長との懇談会

駒場友の会は、毎年春に入会される新入生ご父母を対象として、「学部長との懇談会」を開催しています。今年は五月十七日（土）に開催しました。

学部長の講演（九〇〇番教室）、キャンパスツアー、昼食パーティ（生協食堂）の三部構成となっています。キャンパスツアーでは、約十名に分かれた参加者を三〇名ほどの教員が引率して、図書館、講義棟、課外活動施設、食堂、生協購買部、博物館、一号館時計塔にご案内しました。左の写真は、駒場コミュニケーションプラザの周辺を散策する荒巻健二教授（左端）のグループ。

参加されたご父母から多数の感想をいただいています。「石井洋二郎学部長先生の間、二年間お世話になるのだと思い、お話を伺いにきました。とても親しみやすい話し方で入学式に続き親近感すらわきました。参加して本当によかったです」

第十一回総会報告

第十一回総会を、五月二四日（土）午後四時四五分より、21KOMCEE地下一階レクチャーホールで開催しました。

小林寛道会長の議事進行により、以下の（一）～（五）の議案について審議が行われました。

（一）二〇一三年度事業報告

山本泰事務局長より報告がありました。

①懇談会・講演会・演奏会などの開催主催行事は以下の通り。新入生歓迎特別講演会（四月十五日）／新入生父母と学部長との懇談会（五月十八日）／ホームカミングデイ行事（十月十九日）第十四回演奏会：ピアノ演奏／味覚のアトリエ@駒場（十月二三日）／ロコモ体操教室の定期開催

②会報の発行、ホームページの拡充

会報は二一号を九月に、二二号を三月に発行

③「学生のための寄付」とカレンダーの製作販売

四月、五月と年度末に「学生のための寄付」を実施し、それぞれ三、八四八、〇〇〇円、二、〇四四、〇〇〇円（計五、八九二、〇〇〇円）のご協力をいただいた。お預かりした寄付は、学生用図書の寄贈、学生実験棟の福利設備拡充のための寄付などに充てた（次頁の明細を参照）。／ユータスくん学事カレンダー二〇一四年度版の製作（壁掛け版と卓上版）と販売。

④会員・会友数（二〇一四年三月末日）

終身会員一一二名、通常会員四九五名、

会友三、一六六名。一高同窓会二一八名、東高同窓会九八名。計四、〇八九名。前年度末より二七四名増。

（二）二〇一三年度決算

事務局長より別表のとおり決算の報告が行われ、その内容が適切である旨、監査報告がありました。

（三）二〇一四年度事業計画

事務局長より説明がありました。

①懇談会・講演会・演奏会などの開催

新入生歓迎特別講演会（四月十四日）／新入生父母と学部長との懇談会（五月十七日）／ホームカミングデイ行事（十月十八日）第十五回演奏会：チェンバロ演奏／味覚のアトリエ@駒場（十月末）／ロコモ体操教室の定期開催（毎月二回）／駒場音楽振興基金の活用

②会報の発行

二三号を九月に、二四号を三月に発行

③その他

石浦章一総合文化研究科副研究科長、坪井俊数理科学研究科長を加えた「事務局運営会議」を四半期ごとに開催する。

（四）二〇一四年度予算

事務局長より別表のとおり説明がありました。

（五）役員の一部交代（＊印）

会長：小林寛道　副会長：竹田晃　遠山敦子　理事：浅島誠＊、江川雅子　風間勝昭、木畑洋一、小島憲道　瀧田佳子、坪井俊、蓮實重彦、松本健　監事：大岸良恵＊、長谷川壽一

以上の議案はすべて提案の通り承認されました。詳細は、駒場友の会のホームページをご参照ください。

収入の部

		2013年度予算	2013年度実績	2014年度予算
1 会費収入		9,000,000	9,404,000	9,000,000
	11 通常会員会費	2,000,000	1,888,000	2,000,000
	12 会友会費	6,500,000	6,740,000	6,500,000
	13 終身会費	500,000	776,000	500,000
2 寄付収入			5,922,400	4,150,000
	21 学生のための寄付	5,000,000	5,892,000	4,000,000
	22 その他		30,400	150,000
3 事業収入		445,000	564,741	642,000
	31 2014ユータスくんカレンダー	135,000	137,141	217,000
	32 味覚のアトリエ@駒場	30,000	22,000	25,000
	33 2015ユータスくんカレンダー	280,000	405,600	400,000
4 雑収入		4,500	2,722	3,500
	41 預金利息	1,500	1,222	1,500
	42 その他	3,000	1,500	2,000

小　計	14,449,500	15,893,863	13,795,500
前年度繰越金	8,844,529	8,844,529	9,239,039
合　計	23,294,029	24,738,392	23,034,539

支出の部

		2013年度予算	2013年度実績	2014年度予算
1 印刷費		1,200,000	977,474	1,072,000
	11 会報・案内等の印刷費	720,000	876,254	742,000
	12 封筒・便箋等の印刷費	480,000	101,220	330,000
2 通信費		1,760,000	2,201,779	2,300,000
	21 郵送費	1,650,000	1,979,165	2,100,000
	22 電話・インターネット使用料	110,000	222,614	200,000
3 事務経費		620,000	763,684	760,000
	31 事務用品費	200,000	254,899	250,000
	32 ゼロックス使用料	190,000	254,594	260,000
	33 会費等振込料金負担分	230,000	254,191	250,000
4 人件費		2,150,000	2,060,800	2,012,500
	41 事務局スタッフ	1,950,000	1,905,800	1,612,500
	42 臨時	200,000	155,000	400,000
5 運営費		1,725,800	1,609,872	1,641,684
	51 事務室借料	205,800	205,800	211,684
	52 光熱水料	70,000	132,530	130,000
	53 会員証作成費	750,000	583,848	600,000
	54 入会勧誘活動費	300,000	298,579	300,000
	55 庶務費	400,000	389,115	400,000
6 事業費		2,100,000	2,027,013	2,000,000
7 寄付		4,850,000	5,858,731	4,000,000
8 予備費		43,700	–	9,316

小　計	14,449,500	15,499,353	13,795,500
次年度繰越金	8,844,529	9,239,039	9,239,039
合　計	23,294,029	24,738,392	23,034,539

2013年度「学生のための寄付」使途明細

駒場図書館	1,067,581円
学生実験棟福利設備拡充など	
学部への寄付	3,119,061円
駒場祭2013	500,000円
ハーバード大学交流プログラム	382,000円
北京大学交流プログラム	484,000円
グローバルオフィス関連行事	216,800円
三鷹国際学生宿舎	89,289円
合計	5,858,731円

食を通じて文化を育む：ルヴェソンヴェール駒場の十年

伊藤文彰

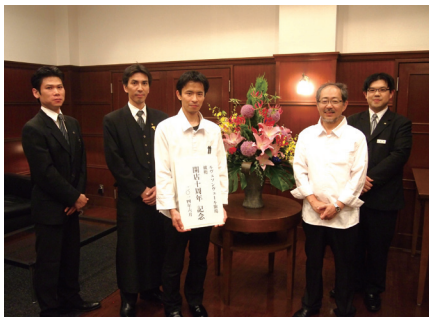
文京区本郷の東大正門近くで、レストランを開業したのが十五年前、そしてご縁を頂き駒場に来て早や十年が経ちました。この間、駒場友の会の皆様には御贔屓いただき、心から御礼申し上げます。

元々、私共の会社の発祥は京都にある「まどい」という、私の父が京都大学の近くに五〇年前に創業したレストランです。常連客が多く、私はいつも大学の先生方や学生さんが周りにいる環境で育ちました。そんな私にとって大学の中でレストランを営業することは、それほど特別なことではありませんでした。私達は父の代から長い間、フランス料理を通じて手作りの食を実践してきたのです。

駒場での店づくりを考えた時に、まず、将来日本を背負って世界で活躍するであろう東大生に、世界の中で最もスタンダードといえるフランス料理の楽しみ方を伝え、手作りの食のよさを感じてほしいという想いがありました。

近年、食事にかける時間の短さや個食の問題などが取りざたされていますが、人と会話を楽しみながら、ゆっくり、手作りの食を楽しむ、そんなレストランを実現したいと考えました。それを実践するためには、専門的な調理人による的確な調理と、その前提として、目利きを生かした安全な食材の厳選、仕入れが必要になります。

産地や食品の偽装や農薬の混入などが最近、世間を騒がせています。他にも防腐剤や添加物、化学調味料、日本の食糧自給率の低さ等々、食を取り巻く様々な問題は数え上げればきりがないかもしれません。



伊藤オーナーシェフ（右から二人目）と、ルヴェソンヴェール・橄欖のスタッフ。左から森山岳穂(支配人)、山口徹(シェフソムリエ)、牧村耕平（シェフ）、高橋健太（マネージャー）の皆さん（2014年6月14日）

工業製品の様に作られた業務用の食品がいかに多く氾濫していることか。そういう商品だけでレストランのメニューはすぐ出来てしまいます。出来合いの食品を使わず、手作りの調理を実践することは、コストがかかり大変なことですが、最も守るべきものだと思っています。そのことは人(料理人)を育てることにも繋がります。

六年前にハーバード大学ダイニングサービス代表のテッド・メイヤーさんをお招きして、教養学部でシンポジウムが開かれたとき、フード・リテラシーがテーマとなりました。味覚に対しての教育だけではなく、食材をどう生産、調達し、それをどう調理し、それを誰とどのように食べ楽しむのか、栄養、制度、環境問題など食に関わる様々な観点も含めて、その識字力を高めることが重要という内容でした。確かに、味という側面から食を語ることが多いように思いますが、科学的に調味する技術が進んだ今、食するだけでどれだけの人が、その食品の中身を言い当てられるでしょうか?

このシンポジウムに私自身も大きな影響を受け、その後の活動を考えるひとつのきっかけになりました。勿論、手作りの食を提供するレストランを運営すること自体がその意味を持ちますが、その他にも、何度か食に関する講義のお手伝いをさせていただいたり、また、二〇一一年からは毎年秋に「味覚のアトリエ@駒場」というワークショップを開催しています。これは、フランスで開催されている「味覚の一週間」という味覚教育の日本版で、駒場友の会の主催です。

駒場店には旧制一高の方々を始め、大勢の大学OBOGの方が来られます。近年では、卒業生のウェディングパーティーも増えてきました。この様に大学の同窓会館的な役割を担うと共に、様々な音楽のイベントによる発信も行ってきました。昨年からはTABLE FOR TWOという、一食あたり二〇円が寄付され、アフリカの子どもたちに給食が届けられるという活動にも参加しています。

これからも、大学内のレストランとしての意味を考えた上で、駒場における食を中心にした文化的発信を行っていく所存ですので、皆様の御支援の程、宜しくお願い申し上げます。

(ルヴェソンヴェール駒場　オーナーシェフ)

「駒場友の会」ってステキ!

清水康子

この五月、「駒場友の会」に入れていただきました。何も知らなかった私が存在を知ってすぐ入会手続きをした直接の動機は、図書館の蔵書を二冊まで借りられるという実利的なものでした。去年の三月に駒場の非常勤講師の定年を迎え、この三月に本務校の定年を迎え、やっと駒場図書館の利用が可能かどうか聞きに行ったのです。学生として、教養学科フランス科の助手として、非常勤講師として、駒場の図書館にはいつもお世話になってきました。ここ十年くらいは自分の興味や研究のためだけでなく、音大の声楽の学生さんが大学院論文のテーマにフォーレやドビュッシーの歌曲を取り上げるので、その関連の一九世紀・二〇世紀のやや特殊な詩人たちのことを詳しく調べるためにも大いに利用させていただきました。博士論文でフォーレが作曲した『イヴの歌』が取り上げられたとき、原詩を書いたベルギー象徴派詩人ファン・レルベルグについては、あちこちから取り寄せていただく図書館の書籍だけでなく、美術博物館が所蔵する日本各地の美術館の展覧会図録が役に立ちました。修士論文のドビュッシー歌曲分析で登場した詩人テオドール・ド・バンヴィルの新全集は、地下の集密書庫にあってお世話になりました。必要な時に二冊でも貸していただけるのは有難いと思ったのです。

それから、「駒場友の会」の設立趣旨を読んで、感激しました。駒場で学ぶひと働くひとだけでなく、父母のみなさまや駒場キャンパスを訪れ愛してくださるかたがたまでに開かれた会であることがわかったからです。オルガン演奏会と美術博物館のファンである私には嬉しい出会いでした。迷わず終身会員です。駒場キャンパスの存在そのものが時の変化と人のつながりを祝福しているような気がします。

一九六七年に駒場の学生になって以来いつも見上げる時計台を中心にしたキャンパスで思い出深い場所のベストスリーは、ESSのランチオンミーティングで毎日行っていた矢内原公園、山田爵先生を囲んで仏文関係の先生や学生が集まってお花見をした運動場土手、化学の久保彰治先生の授業が何故か心に残る九〇〇番教室。オルガン演奏会で九〇〇番教室に入るたびに、不思議な思いにとらわれます。私の大学一、二年は、医学部処分に始まる異議申し立てとストライキの時代でした。駒場にもたくさんの集会、デモ、建物の封鎖がありました。今は存在しない建物のなかでは、一研と呼ばれていた研究棟と駒場寮の存在感が圧倒的でした。寮住まいの友人から本を譲り受けるので中に入った記憶もあります。昔の図書館最上階の演習室に満ちていた光の暖かさも格別でした。

一年初級文法で朝倉季雄先生が重たいテープレコーダーを毎回運んで教えてくださったこと、フランス科四学期に前田陽一先生がフランス語発音法を母音から始めてボードレールの詩の朗読まで教えてくださったこと、これが私の大切な駒場の宝物です。

(一九七一年教養学科卒、国立音楽大学名誉教授)

HCAP：濃密な一年間

手嶋毅志

HCAP（Harvard College in Asia Program）は、アジア各国と米国の未来のリーダーの関係構築を目的として二〇〇三年に設置されたハーバード大学のプログラムです。

アジアの様々な大学の学生がグループを作り、毎年ハーバード生との交流プログラムを提案し、採択されれば、このプログラムに参加できます。東大の学生は、二〇〇六年から続けて参加しています。

二〇一三年度のHCAP東大プログラムを私たちが担当しました。東大の活動の特長は、このプログラムを毎年わずか十数名の一年生で運営するという点にあります。毎年春に前年の参加者によって新年度に参加を希望する一年生の中からメンバーが選抜されます。ここから、翌年三月までの一年間、彼ら彼女らは全ての仕事を担います。

一月末に行われる「ハーバードカンファレンス」では、プログラム参加大学からそれぞれ八名がハーバード大学に集まり一週間を過ごします。今年のカンファレンスには、アジア八カ国・地域（韓国、香港、インド、シンガポール、ドバイ、タイ、トルコ、日本）から計六四名の学生が集まり、今回のテーマである「持続可能なまちづくり（Building Sustainable Cities）」について議論を重ねました。各国のまちづくりの取り組みの共有に話は始まるものの、白熱すればテーマから離れ、「政治的な自由はどこまで大切か」や「自由主義と社会主義のどちらが持続可能な社会を作るか」などの議論にまで発展したこともありました。

三月末に行われた「東京カンファレンス」では、ハーバード生十二名を日本に迎えて九日間をともにしました。

九日間のうち六日は東京でしたが、三日間を沖縄訪問にあてました。沖縄戦の歴史や米軍基地に関連した問題が今も鮮明に存在する沖縄こそ、将来を担う日米の学生の学びの場としてふさわしいと考えたからです。

沖縄の三日間で最も印象的だったのは、東大生・ハーバード生・沖縄の大学生が基地問題を直接議論したことでした。基地のすぐ近くに住む学生の語りにショックを覚えるハーバード生、基地はあっても構わないという考えを持つ沖縄の学生、どの発言をとっても、それは学生たちの生の経験に基づいたもので、当然自分の価値観は揺さぶられました。

「必要な戦争はあるか？」とひめゆり平和祈念資料館前で議論する学生たち。左から石神友希穂、福津命、Rodrigo Andres Murillo、Ved Topkar（2014年3月20日）

ここに参加したハーバード生のひとりはプログラムの終了後に、以下のように書いています。

「沖縄の大学生と基地問題について議論することで、社会問題がいかに複雑なものであるかに気付かされた。議論には、アメリカ・日本本島・沖縄という三つの異なる立場が存在していて、どの意見にも一定の正当性や妥当性があり、全員を満足させるような解決策を生み出すことの困難さを痛感させられた」

毎年の活動によってさまざまな「つながり」が蓄積されてきました。ご支援くださる沢山の方々との出会い、カンファレンスで出会う各国からの参加者たち、一年間の濃い時間を共有する同期のチーム、かつてプログラム参加した人たちのネットワーク。

こうしたつながりは、徐々に強くなっています。今年の東京カンファレンスがきっかけで東北支援の団体に関わり始めたハーバード生や、インドの参加者のもとへ会いに行く同期を見るにつけ、希望に心は踊ります。

昨年、一昨年の二年にわたって駒場友の会よりご支援・協賛を頂戴しました。成長と学びの貴重な機会であるこのプログラムを継続・改善して実施していくのに、このご支援は不可欠です。

この場をお借りして、改めてお礼を申し上げます。

（教養学部二年　HCAP八期）

第十三回東京大学ホームカミングデイ

十月十八日（土）開催

本郷キャンパスと駒場キャンパス

駒場友の会では当日、中川岳さん（本学学生）によるチェンバロ演奏会を開催します。

会場：駒場コミュニケーションプラザ北館二階多目的教室、午後二時から

詳しくは同封のチラシをご覧ください。

爽やかな風に包まれてゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさったコーヒーは、お支払いの際に会員証・会友証をご提示下さいますと無料になります。

営業時間　11：00～14：30、17：00～21：00

Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902

駒場ファカルティハウス内

駒場友の会会報　第23号

2014年9月15日発行

駒場友の会

会長　小林寛道

〒153-8902

目黒区駒場3-8-1 東京大学

駒場ファカルティハウス内

電話　03-3467-3536

FAX　03-3465-3334

メール

info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp

ホームページ

http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/

デザイン・印刷　株式会社双文社印刷

http://www.sobun-printing.co.jp